

Title	ムカッダスィーの『諸州の知識に関する最良の区分の書』について
Author(s)	竹田, 新
Citation	大阪外国語大学学報. 64 p.103-p.118
Issue Date	1984-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80973
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ムカッダシーの『諸州の知識に関する 最良の区分の書』について

竹 田 新

On al-Muqaddasī's *Aḥsan at-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm* (The Finest Classification of the Knowledge of the Provinces)

Shin TAKEDA

Aḥsan at-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm by al-Muqaddasī is one of the most valuable works in the field of the science of roads and realms. The author belonged to the Balkhī school active in the 10th century. He compiled this book based on what he personally observed, heard from trustworthy people and read at libraries in the course of many years' travelling. In arranging these data he was quite 'scientific' in the sense that he rigorously rejected anything which was not confirmed by experience. He made an attempt to make his book a systematic topography, classified exhaustively every part of the Islamic Empire. In addition, he did not spare himself in writing in an attractive style. As a result it passes for a literary work, too.

I

ムカッダシー al-Muqaddasī の『諸州の知識に関する最良の区分の書』K. *Aḥsan at-Taqāsīm fī Ma'rifat al-Aqālīm* は中世イスラーム記述地理学の主流「諸道と諸国の学」における傑作の一つである。

本稿ではこの地理書の成立過程を考慮しつつ、この書の特徴をその序論を基に紹介してみる¹⁾。

II

「諸道と諸国の学」は9世紀後半、イブン=ホルダーズベ Ibn Kḥurdādhbih (885年以後没) の『諸道と諸国の書』K. *al-Masālik wa 'l-Mamālik* という、行政官用の便覧で机上の産物たる道里記・地誌や、ヤアクービー al-Ya'qūbī (897年以後没) の『国々の書』K. *al-Buldan* という、

自らの旅行に基づく、より本格的な地誌を中心に成立した。10世紀に入ると、前者の便覧を継承したジャイハーニー al-Jayhānī (942年没) の『諸道と諸国の書』、及びクダーマ Qudāmah (948年没) の『地租と書記術』 K. al-Kharāj wa Ṣan‘at al-Kitābah の一部と並び、新たに後者の系統からバルヒー Balkhī 学派の諸作品が出現し、「諸道と諸国の学」はイスラーム地理学界で確固たる地位を占めるに至った。

バルヒー学派の特長は、記述の対象地域を居住世界全体ではなくイスラーム圏に限定すること、理論上の「気候帯」に代わり実際の「州」によって区分すること²⁾、各州ごとに地図（道案内の略図に等しい）を配置することである³⁾。このイスラーム圏だけの記述、しかも当時の政治・文化の中心地イラクではなく宗教上の中心地アラビアから記述を始めること、コーランに従った2大海の描写が世界地図に見られること⁴⁾などは、この学派のイスラーム的色彩の濃さを感じさせる。また、ギリシアのプトレマイオス他の天文地理書からイスラーム世界が導入した「気候帯」と、経緯度に基づく地図とを採用せず⁵⁾、サーサーン朝の行政地理書から継承した非アラブ州の区分と各州の地図の形状を採用することに、ペルシアの影響の強さが感じられる。

まずバルヒー (934年没) が『諸州の姿の書』 K. Ṣuwar al-Aqālīm を著した。この書は、ムカッダシーによれば、大地（恐らくイスラーム圏）を20の部分（州）に分け、それぞれを地図で表し、説明を付したものであった⁶⁾。次いでイスタフリー al-Iṣṭakhrī (951年以後没) がバルヒーの書を基礎にして『諸道と諸国の書』を著した。これはペルシア語やトルコ語にも訳された程で、評判をとった書である⁷⁾。まずこの書の方針及び1葉の世界地図を伴った世界の海洋と主な土地の簡単な紹介に始まり、本論たるイスラーム圏の記述に入る。イスラーム圏がアラビア Diyār al-‘Arab・フェールス Fāris 海（インド洋北西部）・マグリブ al-Maghrib（北アフリカ）[アンダルス al-Andalus（イベリア半島南部）を包含]・エジプト Miṣr・シリア aṣh-Shām・ルーム ar-Rūm 海（地中海）・ジャズィーラ al-Jazīrah（上メソポタミア）・イラク al-‘Irāq・フーズィスターン Khūzistān・フェールス・ケルマーン Kirmān・スィンド as-Sind・アルメニア Armīniyah とアルラーン ar-Rān とアゼルバイジャン Ādharbayjān（まとめてカフカス）・ジバール al-Jibāl（メディア）・ダイラム ad-Daylam（現在のギーラーン）・ハザル al-Khazar 海（カスピ海）・ホラーサーン Khurāsān 沙漠（イラン大沙漠）・スィースターン Sijistān・ホラーサーン・マー=ワラー=アンナフル Mā warā’ an-Nahr（トランス=オクシアナ）[ホラズム Khuwārizm を併記] の20州に分けられ、各州が地図を伴って1章をなし、それぞれの州の範囲、主な地方や都市、旅程などが叙述されている。但し彼の出身地フェールス州だけは、更に風土、人間、財源といった項目の説明がある⁸⁾。

更にイブン=ハウカル Ibn Ḥawqal (988年以後没) がイスタフリーの書を改正・増補して同名の書（別名『大地の姿の書』 K. Ṣūrat al-Ard）を著した。この書の内容はイスタフリーの書とほぼ同じだが、マグリブ・アンダルス・シチリア Ṣiqilliyah には全般的に独自の記述が見られ、エジプト・イラク・アルメニア・ホラーサーン・マー=ワラー=アンナフルも一部修正されてい

る。また地図はかなり詳しく、進歩を見せている（尤も、道案内図的なものの延長であることには変わらない）⁹⁾。彼自身はイブン=ホルダーズベ、クダーマ、ジャイハーニーの書を携えて旅をし、スィンドでイスタフリーと出会い、後者の書の改訂を依頼されたと言っている¹⁰⁾。イブン=ハウカルハウカルの書はその後アンダルスで要約が現れる¹¹⁾。

そして最後に、本稿で扱うムカッダスィーの地理書が現れる。これは上記の「諸道と諸国の学」の他、ジャーヒズ al-Jāḥiẓ (869年没) の『国々の書』(別名『諸都市と国々の奇事との書』K. al-Amṣār wa 'Ajā'ib al-Buldān) やイブン=アルファキーフ Ibn al-Faḳīh (903年以後没) の『国々の書』といったアダブ(人文教養学)的記述地理学「国々の奇事の学」の影響も強く見られる。更には天文表 zīj を用いる天文数理地理学「経度と緯度の学」の要素さえ一部には取り入れられている。

III

ムカッダスィー(又はマクディスィー al-Maqdisī) 或はバッシュアリー al-Bashshārī の名で知られる¹²⁾ Shams ad-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. Aḥmad b. Abī Bakr al-Bannā' ash-Shāmī al-Muqaddasī al-Bashshārī はその名が示すように al-Bayt al-Muqaddas (Bayt al-Maqdis) 即ちイェルサレムに945年頃生まれたらしい¹³⁾。父方の祖父 Abū Bakr はエジプトとシリアの統治者イブン=トゥールーン Ibn Ṭūlūn (在位868年—884年) のためにアッカー 'Akkā の港門を建設した、イェルサレム在住のパレスティナ人建築家 bannā' であり、母方の祖父 Abu 'ṭ-Tayyib ash-Shawā は一族18人を引き連れてダイラムの Biyar 村からイェルサレムに移住し、息子達と建築業を営んでいたようだ¹⁴⁾。

ムカッダスィーは裕福な家庭に育ち、イスラーム法学を始めとする宗教諸学と言語諸学の十分な教育を受けた¹⁵⁾。一説ではその後バグダードに行き、更に研鑽を積んだとも言われる¹⁶⁾。967年に初めてメッカ Makkah 巡礼を行ない、以後、アンダルス全域・スィースターンとスィンドの大部分・イエーメン al-Yaman の一部を除く全イスラーム圏を巡り歩いた¹⁷⁾。

当時のイスラーム世界はアッバース朝の中央集権体制が終焉を告げ、その領土の東部ではサーマーン朝、中部ではブワイフ朝、西部ではファーティマ朝が覇を唱え、以前からのアルダルス・マグリブに加え各地に独立・半独立の王朝が併存する時代であった。しかし、こうした政治的分裂にもかかわらず、社会・経済的にはイスラーム圏内部の統一が保たれており、その中を自由に通行することができた。

彼はこの諸州遍歴の間、「旅人に関係のあることなら、物乞いと大罪を犯すこと以外は何でもした。法学と文学の講義に出席し、苦行者・敬神者となり、法学・文学を教え、演壇に上って説教をし、尖塔から礼拝時刻を告げ、モスクで導師を務め、会衆モスクで訓話を垂れ、学林に足繁く通い、集会で神の加護を祈り、会議で話し、神秘主義者達と harīṣah (小麦汁)、行者達と tharīd (肉汁)、水夫達と 'aṣīdah (小麦粥) を啜り、夜中にモスクから追い出され、荒野を放浪

し、沙漠を彷徨い、暫く身を慎み通すかと思えば、公然と禁断の実を食べ、レバノン Lubnān 山の敬神者達と親しくなり、時としてスルタンと交わり、奴隷達を所有し、籠を頭に掛けて運び、幾度も溺れそうになり、隊商の道がとだえ、法官達や高官達に仕え、スルタン達や宰相達に話しかけ、道中でならず者達と親交を結び、市場で品物を売り、牢に閉じ込められ、問者との嫌疑を掛けられ、軍船上のルーム人の戦闘や夜中のキリスト教徒の打鐘を目撃し、賃金をもらって書物を皮綴じし、法外な値段で水を買ひ、駕籠や馬に乗り、熱風や雪の中も歩き、貴人達に交じって宮庭内に泊まり、織工地区で無学な者達の間に住んだ。……¹⁸⁾」

宗教関係の職種が多いが、彼はイラクのワースィト Wasīt でムアーウィヤ（ウマイヤ朝初代カリフ）賛美に異議を唱えてアリー（第4代正統カリフ）を持ち出したり、ファーティマ朝フスタート al-Fustāt をイスラーム圏第1の都と讃えたりすることなどから、或はイスマール派の宣伝員 da'ī であった可能性もある¹⁹⁾。少なくともシーア派的傾向を多分に持っていたことだけは確かである。然るに、法学ではハナフィー学派を擁護しており、行く先々で法学者の集りに顔を出してはこの学派のために意見を吐いている²⁰⁾。また、ムウタズィラ派や、神秘主義的傾向の強いサーリム派 as-Salimīyah やカッラーム派 al-Karrāmīyah の神学にも好感を持っていた²¹⁾。

そして、旅行中「諸州をパラサング測地して充分に知り、諸境を巡回して正確に定め、諸軍区を訪問して知り、諸法学派を調査して知り、方言や膚の色を理解して整理し、諸地方を熟考して区分し、地租を調査して見積もり、また気候や水を吟味した」結果を駆使して、985年、40歳に達した時、ファールス州都シーラーズ Shirāz で、独創的な地理書を著した²²⁾。彼はこれをまず学者達を優遇したサーマーン朝に献げた（所謂コンスタンティノーブル写本 Aya Sofia No. 2971）が、3年後にはファーティマ朝のために少し手を加えた（所謂ベルリン写本 Cat. Ahlwardt, No. 6033 で『諸州の知識に関する最良の区分』の書名を持つ）²³⁾。

その後の彼の消息は定かではなく、没年は991年以降と見られている²⁴⁾。

IV

ムカッダシーはこの著書の前置きにおいて、まず神の世界創造に対する讃辞に続き、「学者達は自分達の足跡が消えないよう、名声がとぎれないよう書物を著すことに未だ熱心である。そこで、私は彼等の先例に倣い、彼等の慣用に従い、私が思い出される学問を、私の主を満足させる、人類に有用なものを作り上げたい。学者達が諸々の学問にまず手を着け、初めて諸作品を著し、然る後に後の者達が彼等に倣い、彼等の言葉を説明したり、要約したりしたのである。それで、私は彼等がなおざりにした或る学問を志し、彼等が正しい加減にしか述べなかった或る学術を一人でやろうと考えた²⁵⁾。」という言葉で、何故この書を著すのかを示そうとする。

次いで「その学問とは、イスラーム圏諸州の記述であり、諸州が有する沙漠・海・湖・川、そして有名な都と著名な町、通行される宿駅と使用される街道、薬草と治療法の源泉、運搬品と交易品の出所、各地住民の表現・音声・言葉・膚色の相違、彼等の法学派・度量衡・通貨・両替の

相違、彼らの食物・飲物・果実・水・長所・短所・輸出品・輸入品、沙漠の危険地点、旅程の宿駅数、塩地・岩地・砂地・丘陵・平地・山岳、石灰岩・砂岩とそれらの多少、豊かで肥えた地と乏しく不毛の地、霊場と関所、特産品と風習、諸国と境界、寒冷地と炎暑地、makhālif (イェーメン諸地区) と rumūm (クルド人自治区)、登録地と非登録辺境地、手工と学問、水の豊かな地と木の多い地、manāsik と mashā'ir (共に巡礼儀礼の地) の叙述である²⁶⁾。」と述べ、何を書くのかを説明している。

更に「これは旅人・商人に必須な、敬神者・篤信者に不可欠な部門であると認める。これは君主・高官が欲し、法官・法学者が求め、庶民・名士が愛し、どの旅人にも役立ち、どの商人も恩恵を得る学問である²⁷⁾。」と述べ、誰のために著すのかを明白にする。そして、この書をまとめるべく旅行中に行なった種々の努力を列挙した後、自分の書が正確なことを強調し、神の加護を求めて前書きを終わる。

次の序章は、まず「私はこの章を堅固な基礎の上に築き、強い柱によって支えた。正しさを求めて努力し、思慮ある者の知性に助けを求めた。誤謬を私から遠ざけるよう、希望を私に達成させるようアッラーに求めた。最高の基礎、最固の構造は、私が目撃して理解したもの、私が知って述べたものである。その上に私は建物を上げ、柱と支えを作った。また、基礎や支え、説明に利用したものには、知性ある人々への質問や、遠くて私が行けない辺境の諸地域について無知や曖昧が見られない人々への質問がある。彼等の意見が一致する物事は認め、意見が異なる物事は退けた。私が行って知らなければならぬ所はそこに赴き、私の心に落ち着かず、私の頭が受け入れない物事は、述べた者に任せるか、『彼らが主張した』と言った。また、諸王の書庫の中に見出した断片で以上を補った²⁸⁾。」と、この書を建物に喩え、どのような材料をどのように用いるのかを説明する。

これに関しては、『私が目撃した基本項目の叙述』の章に「幾人かの学者や宰相がこの部門について著述を不完全ながらも行なった。しかし、その大半、いや全部が彼等の伝聞によるものである。私はどの州も残さず足を踏み入れ、どんな小さな基本項目でも知った。同時に、探求、質問、秘事の洞察を怠らなかった。私のこの書は3部に分けられる。第1は私が目撃した物事、第2は私が信頼の置ける人々から聞いた物事、第3はこの部門などについて著された書物に私が見出した物事である。私はどの王の書庫も残らず通い詰め、すべての派の著作を調べ上げ、あらゆる人々の意見を知った。またあらゆる行者と交わり、どこかの訓戒者とも会った。その結果、この部門について私が望んだものが出来上がった²⁹⁾。」という、より明解な記述がある。

序章では、次に「この学問において私に先んじた者は誰も、私が目差した道を取らず、私が意図した利点を求めなかった。……これら(ジャイハニー・バルヒー・イブン=アルファキーフ・ジャーヒズ・イブン=ホルダーズベの書)が、私が探し、求め、書庫と書物を引っ繰り返した後、この部門で手に入れた文献である。私は彼等の権利を無視しないよう、彼等の作品を盗用しないよう、必要な場合以外は、彼等が既に記した物事は述べないこと、彼等が既に言及した物事は説明しな

いことを心掛けた^{30).}」と、先人達とどのように違い、彼等の書をどのように扱うのかを述べる。

これもまた、『マグリブ』の章に「もし誰かが“あなたはこの州の奇事の多くを述べずに捨て置いた”と言うならば、その人に対して“私より前の者が彼等の作品で述べた物事は捨てた”と言おう。私の書が誇る点の一つは、他人が述べた物事は言及しないことであり、彼等の書の最も粗野な点はその反対を行なったことである^{31).}」と、一部繰り返しが見られる。

序章はその後、この学問は類推ではなく目撃・体験によるとの断言や、簡略化した語句や曖昧な語の意味説明に続き、「私は高尚さと稀少さのために、この書に曖昧さと比喩を少し入れた。そして、確信のため論証を、確証のため逸話を、洗練のためサジュウ（押韻散文）を、天恵のため伝承をこの書に取り入れた。更に、大衆が熟思した時に分かるよう、この書の大部分を敷衍し、学者が熟考した時に尊ぶよう、この書を法学の方法で整えた。また、探究のため相違する意見を、用心のため機知に富んだ話を述べた^{32).}」と、この書にどのような方法を取り入れるのかを明示する。

そして、「私は様々な意味で町の描写を詳しくし、明白な利点のため各地の事情を述べ、極めて必要なことなので道を明らかにし、よく広まった知識ゆえ州を地図に描き、より適切なことなので地方を区分した^{33).}」、更に三つの情報源などの再度の言及を挟んで、「私はイスラーム帝国以外は述べず、異教徒の国々は取り扱わなかった。なぜなら、私はそこに足を踏み入れたこともないし、そこについて述べることで何の利益があるとも思わなかったからである。但し、異教の地にあるイスラーム教徒の居所は述べた。私はイスラーム帝国を14州に区分し、非アラブ al-‘Ajam 諸州をアラブ諸州から分離した。次いで、各州の諸地方を区分し、州都を置き、諸地方“都”を述べ、町や軍区を並べたが、その前に、それらを地図に表し、境界線を描き、周知の街道を赤色で明示し、金色の砂地を黄色、塩辛い海洋を緑色、周知の河川を青色、有名な山地を茶褐色にし、その描写がすぐ分かり、特権層も庶民層も理解するようにした。アラブ諸州はアラビア半島・イラク・アクール Aqūr・シリア・エジプト・マグリブで、非アラブ諸州はマシュリク al-Mashriq・ダイラム・リハーブ ar-Rihāb・ジバル・フーズィスターン・ファールス・ケルマーン・スィンドである。そして、アラブ諸州の間に荒野が、非アラブ諸州の中央に沙漠がある^{34).}」と、この書がどのようなプランをもって書かれるのかを説明して序章を終える。

付言すれば、以下、第1部には『海洋と河川の叙述』、『名前とその相違の叙述』、『諸州の特色の叙述』、『諸学派と庇護民の叙述』、『私が目撃した基本項目の斜述』、『意見の異なる諸所の叙述』、『私が法学者のために要約した章』（各地方“都”とそれに属する町々の列挙）、『世界の7気候帯とキブラの方向の叙述』が続く。そして第2部は『イスラーム帝国の叙述』で始まる各州の地誌となっている。

V

上記の序論から読み取れるこの書の特徴の第1は、三つの情報源や法学書の著作方法を用いて、

この書を科学書たらしめんとしたことである。

三つの情報源のうち彼が主たる情報源としたものは、第1の自身が旅行中に目撃・観察した物事である。「街道で、町から精々10パラサングの所を歩いていると、いつも隊商から離れ、真っ直ぐ町を見に行った。時には男達を同行させ、夜道を仲間の所へ帰った」ことや、フスタートで聞いた金曜日の礼拝者の莫大な数を自分の眼で確認するまで信じなかったことに、彼の観察における熱心さと正確さが窺われる³⁵⁾。こうした観察の結果は各州の地誌の至る所に見られ、アデン 'Adan やイラク南部湿地帯の al-Baṭā'ih のアラビア語方言とマシュリク・ダイラム・ジバール各地のペルシア語諸方言の分析³⁶⁾、アラブ人・イスラーム教徒と他者とのアラビア語正則度の差の明示³⁷⁾、メッカのカアバと聖モスク・メディナ al-Madīnah の預言者モスク・イェルサレムの阿克サー=モスクと聖域・ダマスクス Dimashq のウマイヤ=モスク・フスタートのアムル及びイブン=トゥールーン両モスクなどの描写³⁸⁾、各州の宗派・法学派・コーラン読誦法の網羅を始め、ホラズム住民の頭形の異様さ、マグリブ住民の色白・碧眼といった記述³⁹⁾、ザムザム Zamzam の泉の水質変化、ティベリアス at-Ṭabarīyah の温泉治療、スィーラーフ Sīrāf 沖海底の湧水の利用といった記述⁴⁰⁾ など、例を挙げると切りがない。特に興味深いのは、乾燥地域が多いため水の観察が極めて細かいことで、各地の生活が川・湖・泉・井戸・灌漑用水路・溜池のどの水源に依存しているのか、更にその水が軽い、重い、甘い、塩辛い、美味しい、不味い、良い、悪い、まあまあ、健康的な、致命的な、消化の良い、下痢を催す、便秘させるといった表現で、どのような水質なのかを、必ず明らかにしている。

第2の彼が会った人から得た情報は、(a) 情報源の人物と場所、(b) 人物、(c) 場所、を記す、(d) どちらも明示しない、の4通りに分かれる。例えば、(a) 「アデンの海岸で Abū 'Alī b. Ḥāzim……、彼は……を描いた。」「レイ ar-Rayy で法学者 Abū 'Ṭayyib 'Abd Allāh b. Muḥammad al-Jalīl が私に告げて……と言った。」「ダマスクスで法学者 Abū 'Abd Allāh が……と言うのを聞いた。」(b) 「Shāfi' b. Muḥammad が私に伝えて……と言った。」「法官 Abū 'l-Ḥusayn al-Qazwīnī が……と言うのを聞いた。」(c) 「ボハラ Bukhārā で或るエジプト人……、彼は……と言った。」「フェルマー al-Farmā で一団の人が……と述べるのを聞いた。」(c') 「ティベリアスの人々が……と述べるのを聞いた。」「マグリブの或る長老……、彼は……と言った。」(d) 「或る長老が……と言うのを聞いた。」「商人の一団が……と言うのを聞いた。」「或る男が……と言うのを聞いた。」である⁴¹⁾。(a) (b) にはイスナード（伝承者系譜）を記述したものが含まれる。

これらの情報源の大半が法官・法学者ということもあり、内容は宗教的なもの、就中イスナードなしの情報では、ミナー Minā で金曜礼拝が合法か、白堊での沐浴が可能かといったイスラーム法の解釈に関するものが圧倒的に多い⁴²⁾。こうした情報は内容そのもののためと言うより、ニーシャープール Naysābūr 大守 Abū Muḥammad al-Mīkālī、注学者 Abū Ḥamid al-Baghūlānī (993年没)、法学者 Sahl b. aṣ-Ṣu'fūkī (997年没) といった高名な指導者・有名な学

者との接触の誇らしげな証拠を示すため、言わばこの書の格付けのために取り入れたきらいがないでもない⁴³⁾。また、情報の中には、彼が正しいと見なすものだけでなく、疑いを持つものもある。彼が疑問視する情報をも入れたのは、人々の間に誤って流布しているその情報を正そうとしたためや、昔から信頼あるイスナードによってその情報が伝わって来たためであろうか。尤も、イスナードによる情報の中には、アーイシャ ‘Ā’ishah (預言者の妻) が語った預言者とアブー=バクル (初代正統カリフ)・ウマル (第2代正統カリフ) の墓の位置、預言者が定めた各地からの巡礼者の各巡礼開始地点といったムカッダスィーが正しいと見なすものが数多く含まれている⁴⁴⁾。

第3の彼が著作物から得た情報は、(a) 作品名なり著者名なりを明記する、(b) どちらも明記しない、更には (c) 無言だが引用と思われる、に大別される。(a) としては、ジャーヒズの『諸都市の書』K. al-Amṣār, イブン=ホルダーズベの書、イブン=アルファキーフの書、ジャイハーニーの書、クダーマの『地租の書』, バルヒーの書、イスタフリー [の書] を始め、ワハブ Wahab (733年没) の『始まりの書』K. al-Mubtada’, シャイバーニー ash-Shaybānī (805年没) の『強制の書』K. al-Ikrāh 他、[ヌアマーン an-Nu‘mān (974年没)] の『イスラームの柱の書』K. ad-Da‘ā’im, シムシャーティー ash-Shimshātī (987年没) の歴史書, al-‘Akkī [の歴史書], [イブン=ワハシーヤ Ibn Waḥshīyah (9世紀前半没) の?]『護符の書』K. at-Ṭilasmāt, 『大天文表』az-Zīj al-A‘ẓam, 『メディナ事情』Akhbār al-Madīnah, 『バスラ事情』Akhbār al-Baṣrah, 更にはアブー=マアシャル Abū Ma‘shar (886年没) の占星術書, イブン=アルファキーフ他からの孫引きとも取れるイブン=アルカルビー Ibn al-Kalbī (820年没) やイブン=クタイバ Ibn Qutaybah (828年没) やバラズリー al-Balādhurī (829年没) からの引用などが挙げられる⁴⁵⁾。(b) としては、ニーシャープールの或るカッラーム派長老の著書, ブワイフ朝君主アドド=アッダウラ ‘Aḍud ad-Dawlah (在位949—983年) の書庫所有の書物や地図, ブワイフ朝宰相サーヒブ aṣ-Ṣāhib (995年没) の書庫所有の書物と地図, サーマーン朝君主の書庫所有の地図, ニーシャープールの Abu ‘l-Qāsim b. al-Anmāṭī 所蔵の地図, カリフ達の或る書庫所有の書物や, 単に「或る本で読んだ」「或る本で見つけた」と記すものがある⁴⁶⁾。

(a), (b) の内容は海洋の数, アラビアやエジプトの収入額, マシュリクの区分, ホラーサーンの特徴, 双角主の堰の探検談, インド洋の形状など多方面に亘っているが, クダーマによるアラビア他の収入額や, イスタフリーによるスィンドの町村名以外は, ムカッダスィーは必ずしもすべて正しいと考えている訳ではない⁴⁷⁾。(c) としては, イブン=ホルダーズベの『諸道と諸国の書』やイブン=アルファキーフの『国々の書』などが挙げられるが, イラークやアハワーズ al-Ahwāz (即ちフーズィスタン) の地租, イエーメン地方の makhālīf などは前書から, 潮汐に関するカアブ Ka‘b (652年以後没) の意見, ハルカンド Harkand 海 (インド洋東部) 域の描写などは後者から, それぞれ引用したものと思われる⁴⁸⁾。

そして, (a) の始めに挙げた主要な先人達の書には特に批評を加え, ジャーヒズとイブン=ホルダーズベの書は「要約され過ぎており, 余り役に立たない。」, イブン=アルファキーフは「大きな

町以外は述べず、地方や軍区を並べなかった。また、不適切な知識を本に入れた。」その書は「まるでジャーヒズの書と『大天文表』を見るかのようだ。」ジャイハーニーは「知られていない宿、捨てられた駅を述べた。また、地方を分けず、軍区を並べず、町を描かないで手を抜いた。」彼の書は「イブン=ホルダーズベに基づくことのすべてを含み、その上に建っている。」バルヒーは「有益な基本事項を述べず、有用な事柄を区分・配列によって明らかにせず、多くの主要な町を捨て置き、述べなかった。」と記す⁴⁹⁾。しかし、それらの具体例を示しておらず、説得力を欠く。ムカッダシーの批評には、それにより彼等の書の価値を下げ、自分の書を持ち上げること、また以前の文献を何の批評もなく引用していく先人達の方法から脱却し、新しい著作方法を作ることという少なくとも二つの目的があったのではないだろうか。

自らの観察結果を拠り所とし、欠落だけを信頼の置ける人物や書物からの情報で補うという“科学”的な記述を目差すムカッダシーは、叙述の公正さを期すために法学書の方法を巧みに取り入れている。その第1はイスナードの利用である。これはハディース（聖伝承）学者・法学者ばかりでなく歴史家もよく使う方法であるが、ムカッダシーは情報の正確さを目差すためには勿論だが、情報の権威付けや情報の責任逃れのためにもこの方法を利用したようだ。例えば、ナイル an-Nil の人身御供の古習、Mujāhid b. Yazīd が「洞窟の人達」らしき死人達を見た話などは情報の権威付けのため、イブン=アッバース Ibn 'Abbās (688年没) が語る潮汐の原因及びコーランの聖句の説明などは情報の責任逃れのためのイスナード利用と思われる⁵⁰⁾。

その第2は類推 qiyās よりも慣用 ta'aruf の多用である。これはムカッダシーが重視する方法であり、「私は知識を慣用に基づかせた。」「慣用は私の流儀の基本であり、類推に優先する。」と断言する⁵¹⁾。特に行政区分に関する問題にはこの慣用を頻用する。類推ではフェルガナ Farghānah 地方の都となるクバー Qubā を単なる町と見なし、アラビア半島州の町々より規模の大きいシリア州の村々を村に入れたことを始め、バビロン Babil を州名に使わず単なる軍区とし、スィースターンを独立州とせずにホラーサーン分州の1地方と考え、イスファハーン Isfahān をフェールス州ではなくジバル州に入れたこと、更にはガルジスターン Gharj ash-Shār をバルフ Balkh 地方から独立した準地方とし、フーズィスターン州を従来の7地方としたことなどはこの慣用に基づくのである⁵²⁾。

VI

第2の特徴はイスラーム圏の土地を余す所なく区分・整理した地理書を作り上げようとしたことである。この区分こそ彼の書の背骨を形成するものであり、イスラーム地理学では初めての地理術語の明瞭な使い分けが見られる。

ムカッダシーはイスラーム帝国を従来の20州から、前述の如くジャズィーラをアクール、マー=ワラー=アンナフルとホラーサーンとスィースターンとをマシュリク、アゼルバイジャン・アルラーン・アルメニアをリハーブとして、アラブ6州と非アラブ8州の計14州に整理し直した。

即ち、サーマーン朝の領土をまとめてマシュリク州となし、海を除外し、沙漠を番外としたのである。海や沙漠は本来の居住地でないので外したのだろうが、通例の3州を単に当時の政治状況を基に1州としたことにはかなりの無理が感じられる。政治的統一体を尺度に据えると、アラビア半島州は、彼自身が言明しているように、ファーティマ朝、ズィヤード朝、ブワイフ朝などに分割統治されており、1州とは見なせなくなる⁵³⁾。このように彼の14イクリーム（州）区分は必ずしも客観的なものとは言えず、サーマーン朝へのおもねりや、伝統的な7イクリーム（気候帯）概念の影響も感じさせる。

とは言え、この区分は彼の熟慮の産物で、イスラーム圏が西のアラブ圏と東の非アラブ圏に分けられ、対称形をなしている。即ち、前者にルーム海で分けられるマグリブ（北アフリカ）とアンダルスという双頭からなるマグリブ（西方）州があれば、後者にはジャイフーン Jayhūn（オクサス）川でハイトル Hayṭal（トランス=オクシアナ）とホラーサーンの2部に分かれるマシュリク（東方）州があり、後者の番外ファールス沙漠（イラン大沙漠）に対して、前者の番外にはアラブ沙漠（シリア沙漠）が置かれている⁵⁴⁾。

各州は複数の地方 kūraḥ や準地方 nāhiyah に分けられ、各地方は一つの都 qaṣabah と複数の町 madīnah、郷 rustāq、村 qaryahなどを有し、準地方も多くの場合複数の町を有する。そして地方“都”のどれかが州都 miṣr を兼ねる。州都は通常一つであるが、アラビア半島とマグリブとマシュリクにはそれぞれ二つある。アラビアはメッカとザビード Zabīd、イラクはバグダード、アクルはモースル al-Mawṣil、シリアはダマスクス、エジプトはフスタート、マグリブはカイラワーン al-Qayrawān とコルドバ Qurṭubah、マシュリクはサマルカンド Samarqand と Īrānshahr（ニーシャープール）、ダイラムは Shahrastān（ゴルガーン Jurjān）、リハーブはアルダビール Ardabīl、ジバルはハマザーン Hamadhān、フーズィスターンはアハワーズ、ファールスはシーラーズ、ケルマーンはスィールジャーン as-Sirajān、シンドはマンスーラ al-Manṣūrah である。彼は州都を君主、地方“都”を侍従または司令官、町を兵士に喩え、州都を州の最高権力者が居住し、官庁が集まり、地方長官達が叙任される所で、州の町々が帰属する所と定義する⁵⁵⁾。また、町は説教壇を有し、通常はモスクの他、市場や城塞などを具えている所である⁵⁶⁾。

更に、特殊な土地区分として、軍区 jund（軍人使用）、登録地 ṭassūj と非登録辺境地 thaghṛ・takhm・ṭaraf（行政官）、“地区”‘amal（財政官）、寒冷地 ṣurūd・maṣārid と炎暑地 jurūm（地理家）、地区 mikhlāf（イエーメン人）、自治区 ramm（クルド人）も使われており、シリアはまた通常の地方区分の他に、風土によって海岸・山岳・溪谷・沙漠周辺の4地帯にも分けられている。

ムカッダシーはこうした区分・整理を徹底させ、どの場所も曖昧なままでは済ませなかった。その結果、時には慣用によってさえ処理できないものがあり、苦心している。例えば、範疇が定かでない土地の場合、軍区もないホラーサーンのサラフス Sarakhs は地方や準地方にはできず、熟慮の末、メルヴ Marw 地方との一体感により、それに加えたが、一つの町もないフーズィス

ターンのトスタル Tustar は地方に数えている⁵⁷⁾。また、帰属がはっきりしない土地の場合、ハ
イタルカホラーサーンが曖昧なホラズム地方は、両者とは別個に『ジャイフーンとその流域』
の項を設けて扱い、シリア・ヒジャーズ al-Hijāz・エジプト間で帰属がもめるアイラ Waylah は、
シリアとの一体感を採り、その一部とする⁵⁸⁾。

前後するが、彼の徹底化は辺境の扱いにも現れ、タルタス Ṭarsūs はこの書の執筆時にはビザ
ンティン領になっていたので、豊富な情報を有しながらも記述の対象から外している⁵⁹⁾。

VII

第3の特徴は文体・表現・語彙に気を配ると共に、各地の特色 khaṣā'iṣ・奇事 'ajā'ib をも取
り入れて、文学作品に仕立て上げようとしたことである。

まず、前述の如くイスラーム法学などからイスナードの方法を取り入れたが、文学からもこの
書の文体にサジュウ体を取り入れたのである。サジュウ体はコーランに現れる文体であるが、次
第に一般の文章にも用いられ、書物の巻頭や巻尾を飾る文体となった。彼はジャーヒズと同様、
この文体を本文にまで広げた。例えば、前述した彼の諸州遍歴の記事の文は「…fa-qad tafaqqahtu
wa-ta'addabt wa-tazahhadtu wa-ta'abbadt wa-faqahtu wa-'addabt wa-khaṭabt 'ala l-
manābir wa-'adhdhantu 'ala l-manā'ir wa-'amamtu fi l-masājidi wa-dhakkartu fi l-jawāmi'i
wa-khtalaftu 'ila l-madāris wa-da'awtu fi l-mahāfili wa-takallamtu fi l-majālis wa-'akaltu
ma'a ṣ-ṣūfiyati l-harā'is wa-ma'a l-khāniqā'iyyina th-tharā'id wa-ma'a n-nawātiyi l-'aṣā'id
wa-ṭuridtu fi l-layālī mina l-masājid wa-siḥtu fi l-barārī wa-tiḥtu fi ṣ-ṣaḥārī wa-ṣadaqtu
fi l-wara'i zamānā wa-'akaltu l-ḥarāmi 'iyānā wa-ṣaḥibtu 'ubbāda jabali lubnān wa-khālaṭtu
ḥīnani s-sultān…」となっている⁶⁰⁾。しかし、こうした脚韻を合わせるために無理をしている箇
所もある。例えば、フーズィスターンのアスカル al-'Askar やケルマーンの概要の項では適語を
使えず、イラーク及びシリアの概要の項では -ā' を ā と変え、ダイラムの州都シャフラスターン
やりハーブの町バドリース Badlis の項では格を無視している⁶¹⁾。

次いで、簡潔な表現を用いて文を引き締めた上、余分なことは言及しなかった。アハワーズの
「そのモスクには尊厳がない。」(序文の説明によれば「そのモスクは示し合わせて集まって来る
悪漢・賤民・放蕩者の集団でいつも満たされ、人々は礼拝時も座り込んだ者達から解放されない。
それは乞食共の住まい、不敬な輩供の巣である」の意)、シーラーズの「ṭaylasān (法学者や名士
などが着けるスカーフ)をした人々は何の威光もない。」(同じく「ṭaylasān は高貴な者も卑しい
者も学のある者も学のない者も着けるものである」の意)を始め、至る所に簡潔表現を用いてい
る⁶²⁾。また、イラークのフルワーン Ḥulwān 地方の町々は「小さく、荒廃しており、述べるに
価値がない。」と片付け、マグレブのイフリキヤ Ifriqiyah (現在のチュニジア) 地方の町の一部、
ジャイフーンの諸分流、ホラーサーンのヘラート Hirāt 地方の諸“地区”などは、「述べると長
くなる」として言及していない⁶³⁾。

更に、各州で特有な語を使い、正確さを期すと共に、文にアクセントを付けようとした。例えば、イラクでは šā'īdan (川上へ) に zaqāfan, munḥadīran (川下へ) に shabālan, アンダルスでは bustān (庭園) に munyah, rustāq (郷) に iqlīm, フーズィスタンでは dūlāb (水車) に nā'ūrah という語を用いている⁶⁴⁾。これに関連して第1部の『名前とその相違の叙述』の章には、舟・革なめし工・食料品商など、諸州での呼び名が異なる類似の物事の一覧表が挙げられている⁶⁵⁾。

また、アダブとしての地理書には欠かせない「各地の特色・奇事」も巧みに挿入する。「各地の特色」の典型は「最も洗練された州はイラクである。そこは心を最も軽くし、精神を最も鋭くし、衣食住が足りれば、魂は最も寛ぎ、思考が最も冴える所である。最も誉れがあり、果物が最も豊富で、学識・栄誉・寒さが最も多い州はマシュリクである。……」という『諸州の特色の叙述』の章や、各州の概要中に述べられる特徴の項目である⁶⁶⁾。そして、「奇事」としては『海洋と河川の叙述』の章中の裸の女王、セイロン Sarandīb 島のアダム峰、樟, ar-Rāmī (スマトラ) 島の蘇枋などの記事や、各州の諸事情の中に述べられたもの、中でも ar-Raqīm (コーラン中の説話) に関する伝承、双角主の堰・洞窟の人達 (同じく、共にコーラン中の説話) についての探険談、ナイルの水源探索の逸話などが挙げられる⁶⁷⁾。

その他、サジュウ体の使用と並んで、この書をより文学作品たらしめる要素としては、韻文を随所にちりばめたことや、「……とは何かを何が汝に知らせるか」というコーランに現れる言い回しを繰り返し利用したことなども挙げられる⁶⁸⁾。

VIII

尚、本論たるイスラーム帝国14州の地誌は、実際には、各州毎に概要：特徴、土地区分、主要都市の概観など、諸事情：風土と特異集団、宗派・学派とコーラン読誦法、言葉、交易、特産、度量衡と通貨、風習、水、鮎物、霊場、奇事、統治、租税など、そして道程を記し、バルヒー学派の従来の地誌よりも多項目に互り、より体系だっている。但し、各州の特徴の後に付されている彩色の地図は、現存のもので見る限りはイスタフリーの地図と余り変わらず、ムカッダスィーの独自性が出ていない⁶⁹⁾。

そして、君主・高官には各州の土地区分・統治・租税・道程といった行政に不可欠な知識、法官・法学者には各州の宗派・学派・コーラン読誦法、敬神者・篤信者には更に霊場、庶民・名士には各州の特徴・奇事など、旅人には言葉・風習・水・道程、商人には加えて交易・特産・度量衡と通貨といった知識を供給し、ムカッダスィーは従来あまり目立たなかった記述地理学の地位の向上に努めた。

IX

『諸州の知識に関する最良の区分の書』は彼の多年に亙る旅行を通じて集めた3種の情報、中

でも自己の観察に拠るものを基礎に置き、且つ法学に対する造詣の深さを利用した科学的地理書である。と同時に、言語に関する非凡な才能を生かして、種々の文学的技巧を凝らした一流の文学作品でもある。

内容はバルヒー学派の特徴たるイスラーム圏だけの地誌であるが、各州の概要に見られる完璧なまでの土地区分は、各州の諸事情に見られる多彩な項目区分と共に、この書のタイトルの正しさを証明する。

ここにおいて、administration の地理学として出発した「諸道と諸国の学」は、地理学の administration に達したと言えよう。

以後、この記述地理学では、西イスラーム圏のアンダルスにバクリー al-Bakrī (1094年没) の著名な世界地誌『諸道と諸国の書』(但し机上の産物) が現れもしたが、ムカッダスィーの書以上に体系だった有機的な地理書は、イスラーム圏の東西を問わず遂に生まれることはなかった。

惜しむらくは、現在、この『諸州の知識に関する最良の区分の書』の後世への影響が殆ど分かっておらず、筆者の知る限りでは、ヤークート Yāqūt (1229年没) やハーッジー=ハルファ Hājī Khalīfah (1658年没) がこの書に幾分か言及している位である⁷⁰⁾。

註

- 1) 本稿で用いるテキストは K. Aḥsan at-Taqaṣīm fī Ma'rīfat al-Aqālīm, ed. M. J. de Goeje, Bibliotheca geographorum arabicorum III, Leiden, 1906 (現在、唯一の校訂本)。
- 2) 「気候帯」も「州」も共に iqlīm という術語を用いる。iqlīm の概念については拙稿「Iqlīm 考—Yāqūt を基に」(オリエント第26巻第2号, 1984年に掲載) を参照。
- 3) その他、自ら旅をして資料を集めたことも、この学派の特長の一つに挙げてよい。
- 4) 2大海説はコーラン25章53節。バルヒー学派はこれをインド洋(紅海・ペルシア湾を含む)と地中海と捉える。
- 5) 例えば、プトレマイオス導入期の代表 al-Khuwārizmī (847年以後没) の K. Ṣūrat al-Ard は「気候帯」によって居住世界を分け、経緯度に基づく地図を描く。また、ムカッダスィーの書だけは、他のバルヒー学派の作品と異なり、「気候帯」の記述に1章を割く。
- 6) Aḥsan at-Taqaṣīm p. 4. バルヒー原本は現在のところ知られていない。
- 7) 有名な Ḥāfiz-i Abrū のペルシア語訳(1420年頃)他がある。
- 8) al-Masālik wa'l-Mamālik, ed. Muh. G. Abd el-Āl el-Hīnī, Cairo, 1961.
- 9) K. Ṣūrat al-Ard, ed. J. H. Kramers, Bibliotheca geographorum arabicorum II, Leiden, 1938.
- 10) ibid. p. 329. イブン=ハウカルはその他、al-Jāhīz の『国々の書』も利用した(pp. 372, 473).
- 11) K. Hay'at Ashkal al-Ard wa-Miqdār-hā fī 't-Ṭūl wa'l-'Ard al-Ma'rūf bi-Jughrafiyā (1150年頃)。
- 12) ムカッダスィー(又はマクディスィー)は彼自身が用いる呼び名(Aḥsan at-Taqaṣīm, p. 21)で、Yāqūt は彼をバッシュアリーと呼ぶ(Mu'jam al-Buldān, ed. F. Wüstenfeld, vol. I, Leipzig, 1866, pp. 7, 653).
- 13) 彼の生涯に関しては、彼の Aḥsan at-Taqaṣīm が殆ど唯一の資料である。この誕生年は、40歳に達した時に地理書を執筆し、それがヘジラ暦375年(西暦985-6年)との言及(pp. 8-9)からの逆算である。
- 14) アッカーの港門建設 p. 163. Abū Bakr はその他、イエルサレムのスルタンに命ぜられて、Yūsuf (旧約のヨセフ)の墓を確認した(p. 46). ash-Shawā 一族の移住 p. 357. 建設業 p. 367.
- 15) 裕福な家庭 p. 440. 十分な教育 p. 32 (彼は法官 Abū 'l-Ḥasan al-Qazwīnī に付いて勉強した)。

- 16) バグダードに行き、学者達の下で学び、図書館に通い詰めた (Aḥmad Abū Sa'd: *Adab ar-Riḥlat wa-Taṭawwur-h fi 'l-Adab al-'Arabī*, Beirut, 1961, p. 77).
- 17) メッカ巡礼 p. 101. 他に978年 (p. 101) と987年 (p. 223i) にも巡礼している。アンダルスは全く訪れず (p. 222). シンドは内部に入らず (p. 475), イエメンも全部は行かなかった (p. 88). また、スイースターンは彼の記述が少ない.
- 18) p. 44, // 2-16. この引用の直前にも、旅行中の職歴が窺知される彼の36通りの呼び名が羅列されている (pp. 43-44).
- 19) ワースイトの事件 p. 126. イスファハーンでもムアーウィヤ賛美に反論する (p. 399). フスタートが第1の都 p. 36, フスタート賛美 pp. 197-198, フェーティマ朝賛美 p. 212.
- 20) ハナフィー派採用 pp. 39, 127-128 (この学派を採る第1の理由として創始者 Abū Ḥanifāh がアリーの言を頼りとするのを挙げる). 尚、コーラン読誦法は Ibn 'Āmir の方法を採用 (pp. 39, 142-143).
- 21) ムウタズィラ派への共感 pp. 38, 238 他、サーリム派への共鳴 p. 126, カッラーム派への好感 p. 365.
- 22) 引用は p. 2 // 15-19. 985年執筆は註13. 補足: 彼の旅行中の足取りは殆どつかめない. 分かっていることは3回のメッカ巡礼 (註17) の他, 977年以後の Sirāf 訪問 (p. 426), 984年の Sarakhs 訪問 (p. 65k), 1年間のイエメン滞在 (p. 88), 4ヶ月のダイラム滞在 (p. 370), 1日の 'Askar Mukram 滞在 (p. 410), 2回以上のシリア沙漠横断 (p. 248), アラビア半島周航 (p. 10) 位である.
- 23) コンスタンティノーブル写本は直接には法官 Abu 'l-Ḥasan 'Alī b. al-Ḥasan に献呈した (pp. 8, 8d, 66k). ベルリン写本に関しては Yāqūt の Mu'jam al-Buldān vol. I, p. 653 参照.
- 24) 991年以後説は A. Miquel (*Aḥsan at-Taḳāsim fi Ma'rifat al-Aqālīm*, Traduction partielle, Damas, 1963, pp. XVI-XVII), 1000年頃説は I. Y. Krachkovsky (*Arabskaya geograficheskaya literatura Moskova*, 1957, p. 211). J. H. Kramers (*Al-Muḥaddasi, The Encyclopaedia of Islam*, vol. III, 1913, Leiden, p. 765) 他.
- 25) p. 1 // 7-12.
- 26) p. 1 // 12-p. 2 // 7.
- 27) p. 2 // 7-10.
- 28) p. 3 // 7-17.
- 29) p. 43 // 5-13.
- 30) p. 3 // 18-p. 6 // 2.
- 31) p. 241 // 5-8.
- 32) p. 7 // 22-p. 8 // 4.
- 33) p. 8 // 4-6.
- 34) p. 9 // 4-p. 10 // 2.
- 35) 引用は p. 45 // 13-16. フスタートの礼拝者の確認は p. 198.
- 36) アデン方言 p. 96 (構成位相での双数語末 n 保持, j の k 発音), バターイフ方言 pp. 32, 34, 128. マシユリク諸方言 pp. 334-336, ダイラム諸方言 p. 368, ジノバル諸方言 p. 398.
- 37) 非アラブのマシユリク人が最も正確なアラビア語 p. 32, シリアとエジプトでは書記がキリスト教徒 p. 183. バグダードの大法官のアラビア語は間違い多し p. 183, 等.
- 38) カアバと聖モスク pp. 71-73, 預言者モスク pp. 80-82, アクサーモスクと聖域 pp. 168-171, ウマイヤ=モスク pp. 157-159, アルム=モスク (下モスク) とイブン=トゥールーン=モスク (上モスク) p. 199.
- 39) ホラズム住民の頭 p. 285, マグリブ住民の膚・目 p. 243.
- 40) ザムザムの泉 p. 101, ティベリアスの温泉 p. 185, スィーラーフ沖の湧水 p. 445.
- 41) 順に (a) p. 11, p. 15, p. 98, (b) p. 78, p. 123, (c) p. 212, p. 208, (c') p. 185, p. 14 (d) p. 12, p. 490, p. 336.
- 42) ミナーでの金曜礼拝 p. 76, 白聖での沐浴 p. 187.
- 43) Abū Muḥammad al-Mikālī pp. 186-188, Abū Ḥamid al-Baghūlānī p. 76, Sahl b. aṣ-Ṣu'fūkī p. 187.

- 44) 墓の位置 pp. 81-82, 巡礼開始地点 p. 78.
- 45) ジャーヒズの本 pp. 4-5, 5a, 241. イブン=ホルダーズベの本 pp. 4-5, 57, 105, 189, 222, 241, 362 他. イブン=アルファキーフの本 pp. 4, 14, 210, 212, 241 他. ジャイハーニーの本 pp. 3-4, 16, 20, 68, 115, 241, 269 他. クダーマの本 pp. 16e, 105, 212, 340d. バルヒーの本 pp. 4, 10, 16, 64, 68, 260, 269, 297, 305, 307 他. イスタフリーの本 pp. 447, 468, 475, 476, 477, 478 他. ワハブの本 p. 115. シャイバーニーの強制の本 p. 164, 他書 pp. 152, 249y, 254i. イスラームの柱の本 p. 238. シムシャーティーの本 pp. 120-121. アッキーの本 p. 301. 護符の本 p. 211. 大天文表 p. 241. メディナ事情 p. 82. バスラ事情 p. 125. アブ=マアシャルの本 p. 13i. イブン=アルカルビー p. 257. イブン=クタイバ pp. 64k, 293. バラズリー p. 313. その他, al-Karkhī (921年没) や al-Ka'bi (931年没) の作品も参考にしたのかも知れない (p. 64k).
- 46) カッラーム派長老の本 p. 238. アドッド=アッダウラの本 pp. 41, 133, 159, 258, 294, 388e, 448, 地図 p. 10. サーヒブの本 p. 5a, 地図 p. 10. サーマン朝君主の本の地図 pp. 6a, 10. アンマーティー所蔵の地図 pp. 6a, 10. カリフの本 p. 121. ある本で読んだ pp. 16, 160, 312, 386, 393 等. ある本で見つけた pp. 23, 340 等.
- 47) 海洋の数 p. 16, アラビアの収入 p. 105, エジプトの収入 p. 212, マシュリクの区分 pp. 68, 260 他, ホラーサーンの特徴 p. 307, 双角主の堀探検 pp. 362-365, インド洋の形状 p. 10. クダーマに拠る各地の収入 pp. 105, 212, 340d, イスタフリーに拠るシンドの町村 pp. 476, 477, 478.
- 48) イラークの地租 p. 133, アハワーズの地租 p. 418, イエーメンの諸 *mikhlaḥ* pp. 88-92. カアブの意見 p. 13, ハルカンド海域 pp. 13-14.
- 49) ジャーヒズとイブン=ホルダーズベ pp. 4-5. イブン=アルファキーフ pp. 4, 241. ジャイハーニー pp. 4, 241. バルヒー p. 4.
- 50) ナイルの人身御供 p. 207, 洞窟の人達 pp. 153-154. 潮汐 p. 124, コーランの聖句 (106章2節と4節) p. 95.
- 51) p. 115 と p. 387. その他 pp. 32, 155, 272, 310 等.
- 52) クバー p. 272, シリアの村々 pp. 155, 176. バビロン p. 115, スィースターン p. 260, イスファハーン p. 388, ガルジスターン p. 310, フーズィスターン p. 404. 彼は慣用に準ずるものとして, ハナフィー学派の *istiḥsān* (裁量) も用いる (pp. 156, 313).
- 53) 彼の言 p. 104, ファーティマ朝がヒジャーズ, ズィヤード朝がイエーメン, ブワイフ朝がオマーンを支配.
- 54) 彼は *mashriq* (東方) と *sharq* (東). *maghrib* (西方) と *gharb* (西) とを各々区別し, *mashriq* とはサーマーン朝の領土. *sharq* とは更にファールス, ケルマーン, シンドを含めたもの, *maghrib* とは1州の名, *gharb* とは更にエジプトとシリアを加えたものとする (p. 7).
- 55) 喩え pp. 47, 91, 156, 405. 定義 p. 47.
- 56) 説教壇所有 p. 193. 町には門・広場・隊商宿などもある.
- 57) サラフス pp. 312-313, トスタル p. 405.
- 58) ホラズム p. 284, アイラ p. 179.
- 59) 「ルーム人の手にあるから記述を省いた」 (p. 152). 965年にビザンティン側が奪取.
補足: 宗教関係では一般的な7分説に替わり4分説 (イスラームの法学派・神学派・分派・被護宗教, etc は各四つ) を採るという特徴もある.
- 60) 註18参照.
- 61) アスカル 'Askar Mukram p. 410 (「酒」に *atham* 「罪」を使用), ケルマーン p. 459 (「舟」に *diqal* 「帆船」を使用). イラーク p. 113, シリア pp. 151-152. シャフラスターン p. 358 (対格に主格形を使用), バドリース p. 377 (属格に主格形を他用).
- 62) アハワーズのモスク p. 410 (説明 p. 7), シーラーズの *ṭaylsān* p. 429 (説明 p. 7).
- 63) フルワーンの町々 p. 123, イフリキヤの町の一部 p. 228, ジャイフーンの諸分流 p. 293, ヘラートの諸地

区 p. 309.

- 64) zaqāfan・shabālan pp. 124, 31, munyah・iqlim p. 235, nā'ūrah p. 411.
65) pp. 30-32, 舟の名が36, 草なめし工と食料品商の呼び名が各々5通り.
66) 引用 p. 32 l. 16-p. 33 l. 2.
67) 裸の女王〜蘇枋 pp. 13-14, ar-Raqīm pp. 175-176, 双角主の堰は註47, 洞窟の人達は註50, ナイル水源 pp. 21-22.
68) 韻文 pp. 160, 332, 385, 391, 392-393, 450, 497-498, コーランの言い回し pp. 199, 378, 410. 他に前述した序章の初めの比喩など.
69) 或いは原形を留めていないのかも知れない (J. H. Kramers: *Analecta Orientalia*, vol. I, Leiden, 1954, p. 180).
70) Yāqūt は註23. Ḥajjī Khalifa: *K. Kashf az-Zunūn 'an Asāmī al-Kutub wa 'l-Funūn*, ed. G. Flügel, vol. I, Leipzig, 1835, pp. 167-168. その他 al-Qazwīnī (1283年没) もこの書と考えられるものに触れている (Āthar al-Bilād wa Akhbār al-'Ibād, Beirut, 1969, p. 161). 但し, ムカッダスィー (パッシャーリー) からの引用は Yāqūt・al-Qazwīnī の両前掲書他に数多く見られる.

〔付記〕 『諸州の知識に関する最良の区分の書』は難解なこともあって、現在まで全訳がない。部分訳としては J. Gildemeister によるシリアの章の大半の独訳 (*Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* VII, Bonn, 1884), G. le Strange によるシリアの章の英訳 (London, 1886), G.S.A. Ranking 及び R.F. Azoo によるエジプトの章の概要までの英訳 (*Bibliotheca Indica*, Calcutta, 1897-1910), Ch. Pellat によるマグリブの章の仏訳 (*Bibliothèque arabe-française* IX, Alger, 1950), A. Miquel による序論の大半とシリアの章の仏訳 (Damas, 1963) などがある。また、前記の Aḥmad Abū Sa'd の書 (註16参照), I.Y. Krachkovsky の書 (註24参照), J.H. Kramers の *Analecta Orientalia* (註69参照) の他, A. Sprenger の *Die Post-und Reiserouten des Orients* (Leipzig, 1864), A. Mez の *Die Renaissance des Islams* (Heidelberg, 1922), J. Fück の *Arabiya, Untersuchungen zur arabischen Sprach-und Stilgeschichte* (Berlin, 1950), A. Miquel の *La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11^e siècle* (Paris, 1967), Ḥusayn Mu'nīs の *al-Muqaddasī (al-'Arabī, no. 94, al-Kuwayt, Sept. 1966)* などがこのムカッダスィーの書をかなり詳しく扱っている。